

【研究ノート】

ナバホ織の歴史と現在、展開に見るレジリエンス

天野 圭子

要 旨：ナバホ織はナバホ女性が17世紀に羊を入手して以来、300年以上の歴史を持つ。織物は伝統的母系制を基盤に母から娘へと受け継がれてきた。初期にはプエブロ諸民族やスペイン、メキシコの織物の影響を受けながらも独自の発展を果たした。19世紀になると周辺の先住民族との交易品として重宝され、20世紀には交易所を通じて米国市場に送り出された。女性たちは、優れた技術で時代の求める織物を巧みに創りだしてきた。20世紀後半から女性の社会進出に伴い、織手の減少と専門化が進んだ。1960-80年代に一時期ナバホ織のブームを迎えた。しかし、その後は海外からの模倣品の流入なども影響して、市場の飽和状態が続いている。織手の高齢化も進み、次世代の織手が育つためには新たな市場の開拓が求められている。そんな中、近年ひとつの展開として、保留地内外や海外でナバホ織手によるワークショップや展示会などの活動が行われ、ナバホ以外の参加者も増えている。本研究ではナバホ民族の歴史的背景が、ナバホの織手や織物に与えた影響と、厳しい環境下でも、今日までナバホ織を継承してきた織手のレジリエンスを見ていく。また日本で行われたワークショップをナバホ織手の海外での活動の一事例として、その実際について紹介し、現在の織手を取り巻く状況を考察する。

キーワード：ナバホ民族、ナバホ織、ディネ、レジリエンス、ワークショップ

1. はじめに

北米南西部に位置する、面積約7万平方キロメートルのナバホ保留地に居住するナバホ民族は¹、2010年の国勢調査では約174,000人で北米先住民族最大の保留地人口を持つ²。言語はアサバスカン語族に属し、北米先住民族の言語の中では最も話者数が多い³。伝統的に母系のクラン制を基盤とした大家族を中心に、牧羊など家畜の育成を生業としてきた。しかし1930年代を中心に行われた家畜数削減政策以降、家畜に頼る生活が困難になった。現在ではトライバル政府の各機関や保留地に誘致された資源開発企業などでの賃金労働が、保留地住民の収入の主要な部分を占めている。そのため地域差もあるが、ほぼ保留地外の生活と変わらなくなっている。しかしこのような変化にも関わらず、母系リネージを軸とした儀式⁴が頻繁に行われるなど、家族と親族の紐帯が維持されている(天野2002:83-91)。

かつてナバホ女性は「羊思考 (sheep-minded)」「羊が人生 (sheep is life)」と形容されるほど、日々の生活が羊と繋がっていた。ナバホでは羊などの家畜や放牧地の相続は、伝統的に母系を通じて行われ、羊の主な所有者は女性であった。ナバホ女性は日々の羊の育成に責任を持ち、デッピング、毛刈りなどの大規模な作業は母系の親族集団が共同で行った。こうして大切に育てた羊の毛から織りあげるナバホ織⁵は、女性の財産と考えられており、その技術は代々母から娘へと受け継がれてきた。

2. 北米南西部の織物の歴史

ナバホ、アパッチ民族はカナダ北西部から北米南西部へ移動し、1350年～1500年頃には南西部で暮らしていた。そのころ既に現在のプエブロ民族の祖先⁶にあたる人々が、フォ

ー・コーナズ地域で灌漑施設を構築し、定住農耕を行っていた。バスケット作りや織物も早くから行われており、中でも綿はAD1~AD600年にメキシコから伝播し、AD800年頃に広く使われるようになった。同じころ綿糸を織るための腰機の使用がはじまり、幅の狭い布や儀式用のベルトなどが織られた。1000年頃、綿の栽培に伴い、幅広の布が織れる堅機（垂直織機）が使われるようになった。プエブロ文明は900~1100年に絶頂期を迎えたが、旱魃（1276~1300年）によって南へ移住した。この移動には、ナバホやアパッチの襲撃が一因となったとも考えられている。（Kent 1983:4,34; 大貫 1995:67-70; Wheat et al. 1984:52; Wheat 1984:13; Wheat 2003:351; Kaufman et al. 1985:4）。

16世紀半ばにスペイン人が南西部に到達し、羊やヤギ、馬などの家畜を持ち込んだ。1598年からスペインによる植民地支配が本格的に開始され、プエブロはスペインの厳しい支配下に置かれた。1680年、ホピ、プエブロはスペイン人の弾圧に抗して「プエブロの反乱」を決行し、スペイン人を一時的に駆逐した。しかしスペインの支配は10年余で再開された。（Kaufman et al. 1985:11; Wheat 2003:30-31）。

1638年までにスペイン系の人々がペダル式の足踏織機を持ち込み、（オールド）リオ・グランデ・スタイルと呼ばれる、スペインとこの地域の文化が融合した縞柄の織物が織られた。後にサルティーヨ地方（現在のメキシコ北部）で1600年代から発達したサルティーヨ織⁷などを取り入れた。サンタ・フェでは定期的にワークショップや織物市が開かれた。（Mera et al. 1987:1,40; Wheat 2003:351; Wheat et al. 1984:14; 小谷 et al. 1985:74）。

3. ナバホ織物の歴史

初期ナバホ民族は狩猟採集を主な生業としていたが、プエブロから取り入れた小規模な農耕もおこなっていた⁸。ナバホという名は1630年になって、宣教師の書簡にはじめて登場する⁹。ナバホは母系の親族集団で小規模なバンドを形成し、砂漠地帯に散らばって暮らしていたため、スペイン人の影響を免れた¹⁰。ナバホは襲撃やプエブロを通じて家畜を入手し、1650年には堅機で羊毛を織っていたと推察される（Wheat 2003:351）。その後プエブロの反乱前後にスペイン人の報復を怖れた多くのプエブロ難民がナバホに流入した。ナバホはこれらの難民を統合し¹¹、彼らから織の技術を取り入れていった（小谷 et al. 1985:11）。

以下にナバホ織の歴史と、困難な環境にあっても、柔軟に新たな要素を取り込みながら織を続けてきたナバホ織手のレジリエンスを見ていく。

3-1. 古典期：1650~1865年（強制転住まで）

初期ナバホ織は、18世紀まで堅機でチュロ羊¹²の天然の白黒、茶等でホピ・プエブロの影響の強い縞柄を、綾織で織った¹³。織物は日用品として寝具や衣類とされた。またビル（*Biiil*）と呼ばれる女性のツーピース・ドレスも織られた。この型は今も変わらず儀式で着用されている（Fig.1）。ドレスの様子は、ナバホが織っていたバスケット（Fig.2）の様子が移行したと考えられる。ナバホではバスケットの様子は均衡と調和を表し、人生の循環を暗示する。バスケット作りは女性の仕事で、プエブロから織物を取り入れた時に、織物も自然に女性の仕事となったと推察される。（Wheat 2003:131; Wheat 1985:16; Kaufman et al. 1985:10, 12-13; Wheat et al. 1977:11, 14; House 1994:96-98）。



Fig. 1. ツーピース・ドレス
(Figs. 1-2:2000 年天野撮影)

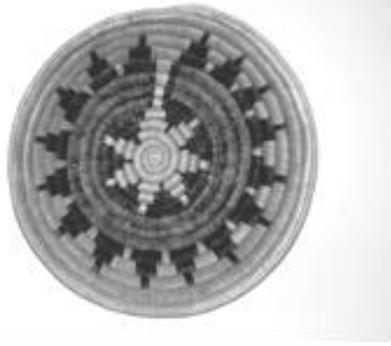


Fig. 2. ナバホ・バスケット



Fig. 3. チーフ・ブランケット
アリゾナ州ハード博物館蔵
(2008 年天野撮影)

<チーフ・ブランケット>

1800年代までに、ナバホ織物は、周りの先住民やスペイン人との交易財として高い評価を得るようになった¹⁴。特に“チーフ・ブランケット”が平原に住む先住民ユテ、スーなどの男性のステータス・シンボルとして好んで着用された。また環境の厳しい平原で生活する人々の生存を支える役割も果たした。チーフ・ブランケットは、もともとナバホが肩から羽織ったショルダー・ブランケットだが、ナバホ織手は交易品としてのブランケットの需要に応えるため、次第に品質を向上させていった。チーフ・ブランケットは1800年～1880年の間で、I期、II期、III期に分けられる。ユテに特に好まれたユテ・スタイルと呼ばれる第I期は、1800～1850年頃で、天然の茶、白の手紡ぎ糸、インディゴの青（1600年代初頭にメキシコからリオ・グランデ溪谷に伝播）の抑えた色使いの太い横縞が特徴で、初期プエブロ・スタイルの影響が強い。Fig.3の左側は第II期の作品で、1800年代半ばに織られた。縞の模様がより変化に富み、色彩も増して、縞の中にブロック模様が入っている。Fig.3の右側の作品は1870年頃の第III期に属し、ナバホ女性たちは従来の縞に加えて、赤のダイヤモンド柄などが入った大胆な模様を好んで織るようになっていた（Wheat 2003:60,351; 小谷 et al.1985:72; Kaufman et al. 1985:11,17, 24）。

<バエッタ>

1800年代半ば以降は、主にリオ・グランデ織の影響を受けた縦長、幅の狭いメキシカン・スタイルのサラペが、つづれ織りで織られた（Kaufman et al. 1985:17）。織柄も、複雑な幾何学模様へと変化した。この頃、スペイン製のバエッタと呼ばれる毛織物がスペイン人からプエブロに持ち込まれ、ナバホに伝わった（Wheat 1985:17; Wheat 2003:69-89）。1821年、この地域がメキシコ領となると、バエッタが布地として大量に流入し、その後は新大陸でも生産された。ナバホ女性はラックやコチニールで染められた赤色のバエッタを特に好み、丁寧に割いて細い再生毛糸として織物に織り込んだ。これは時間のかかる作業だったが、女性たちは鮮やかな赤を得るために手間暇惜しまずに行なった。その頃織られたバエッタ・サラペやポンチョは、機械織で目の積んだバエッタの繊維に合わせて、細く紡いだ糸を使って繊細に織られた。鮮やかな赤と、複雑な幾何学模様が斬新だったので、メキシコ人や米国人との交易で人気があった。1846年ごろから、メリノウールを植物染料で染めて、

ヨーロッパで機械生産した“サクソニー”糸も手に入るようになった。女性たちは、より色彩豊かで複雑な図柄に挑戦するようになった。(Wheat 2003:51 ; 小谷 et al. 1980:78)。

3-2. 古典後期：1865年～1880年（強制転住～）

米墨戦争を経て、1848年～1853年にナバホの地は、合衆国に併合された。合衆国政府はナバホの近隣住民への襲撃を防ぐ目的で、強制転住を決定し、家畜や農作物、果樹などをことごとく破壊して、武力によって人々を制圧した。その結果1863年～1864年にかけて約9,000人が投降し、ニューメキシコ州外れのサムナー砦までの500キロを徒歩で移動する“ロングウォーク”を経験した。その後、サムナー砦の劣悪な環境下に4年間収容されて多くの犠牲者を出した。

人々は食料の不足、病気の蔓延、平原に住む先住民などの襲撃に曝され、女性たちは支給された僅かな綿糸などで生存に最低限必要な衣類を織った (Kaufman et al. 1985:48)。そんな中、兵士から“ジャーマンタウン”¹⁵と呼ばれる国内で機械生産された、合成染料染めの粗い糸が、僅かながら提供された。またリオ・グランデ織のサルティエーヨ・スタイルのブランケットなどが数千枚支給されたことで、後年女性たちがナバホ織の図柄にその要素を取り入れる基となった (Wheat et al. 1977:13, 32)。

1868年ナバホ民族は条約により、元の居住地の一部を保留地と定められて帰郷した。

3-3. 復興期：1880年～1895年

帰郷当初は条約¹⁶による家畜の配給も遅れ、人々は生存のための苦難の生活だった。配給された家畜の約半数は食料となったが、残りは新しい群れをつくる基盤となった。人々は母系親族を中心に助け合い、勤勉に家畜を殖やした。その結果1892年、居留地の家畜数はピークに達した。この年の羊とヤギの合計頭数は約170万頭になった¹⁷。当時のナバホの家畜保有数における人対家畜の割合は、1:70～1:95で最低生活水準の1:40～1:50を十分に超えていた。ナバホは強制転住から20年余りで豊かな先住民族となっていた¹⁸。安定した家畜数は確実な食料の供給をもたらし、人口は増加した。(Bailey & Bailey 1986:94; 天野 2004:88, 107; Aberle 1982:367)。

1880年代に鉄道がサンタ・フェまで開通すると、許可を得た交易者たちがナバホ保留地で交易所をはじめた。交易者はナバホから家畜や家畜から生産される羊毛、織物などを買い取った。

強制転住期を生き抜いた織手たちは、交易所という新たな取引先のもとで、再び織物に情熱を注いだ。配給や交易所からジャーマンタウン糸が手に入るようになると、ほとんどの織手が手軽に使えるこの糸を使用した。ナバホ女性は強制転住後の自由を謳歌するように、高い技術と合成染料の多色糸を使用して、のびやかな図柄を織った。1880年代半ばには、サルティエーヨ織の影響が強い“アイダズラー（目眩し模様）”と呼ばれる複雑な図柄が、ジャーマンタウン糸で数多く織られて交易所に持ち込まれた (Fig.5)¹⁹。この時期を衣服や寝



Fig. 4 1970年代以前に織られたサルティエーヨ・スタイルのラグ (天野蔵、撮影)



Fig.5 過渡期のアイダズラーで、ジャーマンタウン糸使用(ナバホ・ネイション博物館所蔵、天野撮影)

具などの実用的な織物から、次のラグへと変化する途上の過渡期と位置付ける (Wheat et al. 1977:37; 小谷 et al. 1985:15, 16, 74)。

3-4. ラグ期 : 1895 年~1960 年

19 世紀末、ナバホの人々は交易所から安価な機械織の織物を得るようになり、女性がスカート、ブラウスを着用するようになると、衣服や寝具としてのナバホ織物の需要は減少した。交易所は、白人家庭で需要のある、床に敷く重厚なラグを織ることを奨励した。そしてアメリカ人がイメージする南西部のフロンティアスピリットや先住民文化のエキゾチシズムを具現した図柄を考案して織手に織らせた。Fig.11 はハブル交易所内部で、経営者のハブルは、壁面に掛けられているデザイン画をもとに織手に織らせた。これらのラグは消費者の人気を得て、多くの東部家庭の居間へ送り出された。また交易者は、カタログ販売によってナバホ・ラグの知名度を上げ、販路を拡大していった。サンタ・フェ鉄道沿線に、ホテルや土産物店の営業許可を持つフレッド・ハーベイ社も、交易者から仕入れたラグの膨大な在庫を持ち、鉄道でやってくる観光客に販売して収益をあげた。1920 年代から 30 年にかけてラグ市場は好調だった。(M'Closkye 2002:265-271; Reichard 1934)。

交易者にとって相場や天候に左右される羊毛に比べて、ラグは価格の変動が少なく、経済の低迷期にもビジネスを支えた (M'Closkye 2002:105)。交易所は人々に質業など様々なサービスを提供したが、同時に地域経済において一種のモノポリーを形成し、掛売り(クレジット)によって利益を得る仕組みを確立していた。このころ交易所はラグの多くを個別ではなく、重量で安価に買い取っていた(パウンド・ラグと呼ばれる)²⁰。そのため肝心の織手が得る報酬は僅かだった。(M'Closkye 2002: 68, 95-99, 102, 105)。

<地域スタイル>

保留地の各地域では初期の交易者の指導によって地域特有の図柄が発展していた。Fig.6 は、代表的な地域図柄を示す。各地域の織手は、図柄に地名を名付けるなど、自分たちの織物の技法や図柄にアイデンティティとプライドを持つようになった。例えばハブル交易所では枠のあるデザインに赤と黒を中心に使い、交易所が位置する地名から「ガナドの赤」と呼ばれた。1930~1940 年代には古典期の図柄を取り入れて草木染を推進したチンリ地域などが加わり、草木染をする地域は拡大していった²¹ (James 1987:10; Getzwiller 1984: 3-25)。チンリやクリスタル地域は豊かな草木染で、ツウグレーヒルズは天然の羊毛色の緻密な織で、バイヤーに人気があった。シップロック、ルクチュカイ地域等では、19 世紀末からナバホの伝統的治療の儀式に用いる砂絵柄や、儀式の精霊を織り込んだ儀式図柄が織られるようになっていた。儀式図柄は、他の文化の影響を受けないナバホ民族独自のもので、蒐集家に人気があり高値がつく。しかし、現在でも宗教的理由から儀式図柄²²を織らない織手も多い (Rodee 1982:68, 70-72; Begay, M.H 2003:33)。

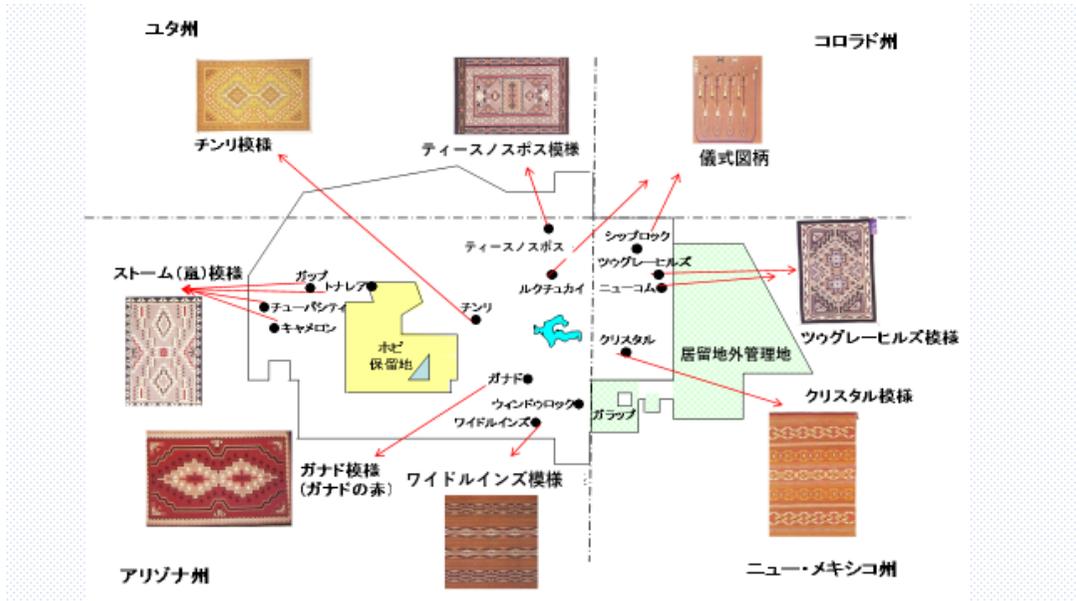


Fig. 6 各地域の織物 (James 1976: I ; Getzwiller 1984:24-25 を参考に天野作成)

<家畜数削減政策の影響>

1934年、米国政府はニューディール政策の一環として、先住民の生活の立て直しを図るべくインディアン再組織法を法令化した。その骨子は1887年から施行されたドーズ一般土地割当法によって失われた先住民の土地の回復と、経済的自立促進、先住民文化の再評価を目指した²³。ナバホは1935年に投票によって再組織法の受け入れを拒否したが、米国政府はナバホ保留地での過放牧による土壌の悪化が、建設中のフーバーダムに与える影響を懸念し、既に1934年から家畜数削減を断行していた。家畜は政府の定めた低価格で買い取られた²⁴。政府は家畜数の削減と共に、羊の改良²⁵や公共事業への就労、職業訓練、農業政策などの代替え策を提供した。1932年の居留地の賃金労働総収入は20万ドルだが、1936年には150万ドルに跳ね上がり、雇用計画は短期的経済効果をあげた。しかし1930年代の終わりから、雇用口は減少、または廃止され、計画は第二次大戦の開戦でとん挫した。家畜数削減直前の1932年、保留地の羊の成畜は約58万頭だったが、1952年には最も減少して22万頭で、半分以下になった。ヤギに至っては1932年の約17万頭が、1951年には約3万9千頭で、約四分の一になった。家畜という経済基盤を失い、それに替わる賃金労働の不足から、人々の生活は急速に悪化し、生活保護に依存する生活に陥った。同時に家畜経済の崩壊は人々の家畜の育成を通じて培ったプライドやアイデンティティの喪失に繋がった²⁶。(Aberle 1982:70; Aberle 1983:643; Kelly 1970:166; Spicer 1965:185; Bailey & Baily 1986:270-271)。

<家畜数削減と織手>

家畜数削減の混沌の中、女性たちに唯一できることは、一枚でも多くの織物を織って交易所へ持ち込み、食料や日用品を得ることだった。2008年に筆者がインタビューした織手、キャサリンさんは幼い頃を振り返って次のように語った：

「当時私たちは織物と深く繋がっていた。よい織物が仕上がって、交易所で少しでも高く売れるようにといつも祈っていた。織物は苦しい家計を助ける重要な収入源だった。母と幼い私は馬に引かせたワゴンに乗って交易所へ織物をもっていった。それは15マイルの長い道のりだった。到着するのに半日、帰るのに半日かかった。交易所の所有者は、私たちと馴染みだったので、織物と、食料品や衣類を交換し、欲しいものがあれば掛け売りにしてくれた。私は家に着くまでワゴンの後ろで、遊んだり、走ったり、あらゆることをして時間を潰した。当時私たちは貧しかった。朝食、昼食、夕食にも兎を食べた。羊は少しになったし、羊の世話は大変な重労働だった。母は羊に頼るかわりに、自分で狩りに出かけて私たちを食べさせてくれた。私は幼かったが織物が織れるようになると、ひたすら織った」(キャサリンさんは今でも家事の合間に織物を織って、近隣の交易所へ持ち込んでいる)。

かつてナバホ女性は伝統的に羊を所有し、家族の資産は羊の数で決まった。しかし、すべての家庭が羊を所有していたわけではない。特に削減政策後は羊を持たない家庭が増えた。羊のない織手は羊毛を近隣や交易所から購入して織ることになる。一年間に一頭の羊から約8~10パウンドの羊毛がとれるが、例えば一枚の3×5フィートのサドル・ブランケットを織るのに2~3頭分の羊毛が必要である(Kaufman et al. 1985:130)。交易所から羊毛や染料を得た場合、最終的に織手の手元に残る収入は僅かだった(M'Closky 2002:95-99)。

3-5. コンテンポラリー期：1960年～

第二次大戦後、保留地の道路の発達、現金経済への移行、教育の普及などによって女性たちは、利益の薄い織物(当時、織手の仕事の時間給換算は、1時間わずか2ドル以下だった)を離れ、割のよい賃金労働に就くようになった。また家畜数削減政策後も干ばつが続き、家畜を飼う世帯が減少した。そのためリネージで管理する土地を離れ、仕事を求めて移住する人が増えた(M'Closky 2002:96; James 1976:10-11)。

一方、織手の専門化が進み、地域の枠を超えて多様な図柄が織られるようになった。例えば複数の地域スタイルを組み合わせた図柄や、絵画のように織るピクトリアル・ラグも発展した。専門の織手の技術は著しく向上し、織手は自分独自のスタイルを確立することで芸術性を高めた。

<交易所の終焉>

1960年代にボーダー・タウンに最初のスーパーマーケットができた。車を持つ家庭が増え、長距離移動が日常となった。安く、品数の多いスーパーは人々を惹きつけ、交易所のビジネスを圧迫した。1970年代、ナバホの人々は、一部の交易者が質業において不当に利益を得ていたことを指摘し、ナバホ・ネイションの援助プログラム(DNA)²⁷を使って訴訟を起こした。連邦取引委員会は交易所に対して厳しい規制を求め、交易所が保留地で質業を営むことは、実質的に不可能となった。こうした要因が重なり、約1世紀にわたってナバホ織物と深く関わってきた交易所は、徐々に役割を終えていった。(Mann 2000:63)。

<ナバホ織のブーム>

女性たちが賃金労働に就いたこと、家畜を飼う家庭の減少等に加えて、南西部の土産物

市場が海外から流入する安価な模倣品に奪われたことも織手減少の要因となった (Wheat et al. 1977:15; M'Closkye 2002:ix)。

しかし 1960 年代にはいつ、著名な画家やデザイナーがナバホ織を所有したことなどから、ナバホ織の認知度は高まった。優れた織手の作品や、過去に織られたナバホ織のアンティーク作品はブームを巻き起こした (Wheat et al. 1984:35)。優れた織手には、遠方の観光地のアート・ディーラー、ギャラリーを通じて顧客の注文が集中した。価格は 1960 年代初め、約 20% 値上がりし、その後も高騰は続いた (James 1976:10-11)。ナバホ織はアンティークも含めて、美術品として、あるいは投資目的で売買され、世界的なオークションにも出されるようになった。この頃、一時的に織手の増加も見られた。(James 1976:10-11;106; Begay M.H. 2003:33)。

皮肉なことに、このようなナバホ織のブームが更なる模倣品の流入に繋がった。ナバホ織の図柄は商標登録の対象外で、米国内で安価な模倣品が売られても先住民が作ったものと偽って販売しない限りは、法律²⁸に抵触しない (M'Closkye 2014:2)。

<ナバホ・トライブの取り組み>

この頃トライブも、織手の保護や公正な取引を奨励する努力をおこなった。例えば部族主導のクラフト販売²⁹や、地域のオークションも積極的に行われてきた。また公立高校などへ、織手の育成を目的とした補助金が支給された時期もあった。これらの試みは、若い世代が織を通してナバホの伝統やアイデンティティの再構築をするという効果を得た (Farley 2003:63)。伝統的織機や織道具を専門に作る若い職人も出てきている。例えば、ナバホの工具職人 M.デチニー氏は、彼の母親が開くナバホ織のワークショップで使用する伝統的織道具を作る (Figs.8, 9)。「織道具作りだけで生計を立てることが可能だとナバホの人々に証明したい」と話す (Navajo Times 2008 June,12)。

4. ナバホ織の現状とワークショップへの挑戦

しかし前述のようなトライブの試みにも拘わらず、近年、保留地では織手の高齢化が進み、世代交代が進んでいない。また米国経済の低迷もあり、1980 年代を過ぎると一時期のブームは終わり、高価になりすぎたナバホ織の市場は、博物館や蒐集家に限られるようになった (Wheat 1987:15)。ナバホ織のアンティークに根強い人気があることも、現代の織手の活躍を阻んでいる (M'Closkye 2014:6-10)。クラウン・ポイント地域で定期的に行われているオークションはよく知られているが、1990 年代から、参加するバイヤーの数が急速に減少している (M'Closkye 2014:1)。次世代の織り手となる若いナバホが、織ることを魅力的だと感じるためには新たな市場の開拓が急務である。

そんな中、近年ナバホ織のワークショップが新たな試みとして注目されている。南西部では、スペインの植民地時代から織物のワークショップの長い歴史がある。保留地の観光が活性化し、世界中から観光客がおとずれる中、ナバホ織の体験型ワークショップが保留地内外で開催されるようになった。参加者はナバホ以外の人 (Non-Navajo) も多い。インターネットの普及で、ナバホの著名な織手のワークショップにも簡単に申し込みができる。観光要素が強いものもあり、保留地の観光促進になっている。男女、世代を問わず、先住民のアートやクラフトを体験したいと思っている人は多い。参加者は、単に織の技術だ

けでなく、先住民文化の背景にある精神世界や宇宙観といったものに付加価値を見出している。また海外でワークショップや展示会を開く織手もみられる (Begay 1994:81)。

5. 日本でのワークショップの試み：グローバルな一事例として

2017年、60年以上の織のキャリアを持つナバホ女性 S 氏と、S 氏の娘 T 氏が日本で4日間のワークショップを開催した。両氏は長年保留地で専門の織手として活躍し、ヨーロッパ、アジアなど海外でのワークショップもおこなっている。日本側の主催者は日本でナバホ・スタイルの織を長年織っている女性グループで、5年前にナバホ保留地で S 氏からワークショップを受けた経験を持つ。今回、日本のグループの希望で実現した。受講者の人数はナバホ講師から16名と指定されており、筆者も他の15名の女性とともに受講者としてワークショップに参加した。場所はゲストハウスを貸し切って行われ、ナバホ講師と受講者は共同生活をしながら織をおこなった。以下にその概要をみていく

5-1. ワークショップのプロセス：

織機に経糸を張る作業、織作業、原毛のカーディング、スピニング、草木染が4日間で行われた (Fig.7)。それ以外にナバホ講師による「開始の儀式、ナバホに織を教えた蜘蛛女の神話語り、プレゼンテーション」の催しがあった。以下に開始の儀式の要約を紹介する。

<開始の儀式>

ナバホ講師は、木製のコヨーテの頭部が彫られた約30センチの儀式用のスティックを持って祈りを捧げた。このスティックには、ナバホ文化の根幹である東南西北、四つの主要方向³⁰に白貝(東)、トルコ石(南)、アワビ貝(西)、黒檀(北)が埋め込まれ、動物の毛皮が巻かれていた。スティックが一人一人の受講者に回され、受講者はそれを翳しながら自己紹介をした。その後ナバホ講師から次のような話があった。「皆さんが織物に対しどれほど熱心かを知って、とても感銘を受けた。私たちの神様は、幼いころから年を取るまで、一生学び続けるようにと言われている。私たちも毎日大地や自然の万物と均衡や調和を保てるように学んでいる。私たちナバホの生き方はホッジョ (Hózhǒ) と呼ばれ、美の中を行く (walk in beauty) という思想に基づいている。母なる大地にある全てのものと均衡と調和を保ちながら生きるという思想である。このように私たち家族は、とてもスピリチュアルだ。織を通じて大地に感謝する。毎朝東に向かって感謝を込めてトウモロコシの花粉を蒔く。ナバホ織を織ることは非常にスピリチュアルな行為であり、祈りでもある。テンション・コードは稲妻、経糸は雨と我々の人生を表す。そしてバツタンを正しい方向に差し込み、開口部を自分の方に向かって開くとき、幸運を呼び込む。常に道具を敬い、祝福の歌を捧げて大切に扱う。この他にもナバホ織には様々な規則がある。皆さんもナバホ織の織手となる以上、規則に従い、神話やスピリチュアリティ、タブーなどを理解し、共有して、ナバホウェイ (ナバホ道) を歩むことが求められる。規則に従わない間違っただ行動は調和を乱してしまうので、一人一人の織り手には責任が伴う。みなさんも我々の信条を分かち合ってくださいと思う」。

5-2. 事例への考察

<ワークショップ実現の要因>

今回、日本で、ナバホ織の本格的なワークショップが実現した要因は二つあると考える。一つはS氏のような優れた織手が、長年にわたって地道に、多様な受講者に織の技術や規則を伝えてきたことである。その活動によって日本の受講者との縁が繋がった。もう一つの要因として、ソーシャルメディアの発達で、ナバホの織手が保留地に居ながらにして、その存在や芸術活動をグローバルに発信できるようになったことが挙げられる。受講者はソーシャルメディアから発信されるナバホ織手の日々の生活や作品を見て、織手を身近に感じる。また国をまたいだワークショップが、ナバホの織手と日本の織手グループの直接のやり取りで開催できたことは、ソーシャルメディアの恩恵である。

<ワークショップでの体験>

本事例ワークショップでは、ナバホ講師と受講者が4日間寝起きを共にし、一緒に温泉を楽しみ、土地の郷土料理を食べるなど、終始和やかな雰囲気での交流が行われた。ナバホ講師は、織技術からナバホの宗教観や神話、タブーに至るホリスティックな講義を行った。S氏は80歳という高齢にもかかわらず保留地から遥々来日し、精力的に織り指導をこなしていた。S氏による蜘蛛女の神話の語り、居留地での生活や幼いころの冒険などを聞くことは、受講者にとってワークショップを興味深いものにしていった。一方、ナバホ織手にとってもグローバルな展開は、経済活動だけではない。本事例のように海外の開催地に出向いて滞在することで、その土地の文化や織物、人々に触れる。S氏によれば、多様な人々や文化に触れることは、彼女自身の創作活動の糧になっているという。日本でのワークショップはナバホ講師と受講者双方にとって貴重な体験となった。



Fig. 7 グループで織る参加者
(天野撮影：2017年)



Fig. 8 筆者の織機(ナバホ職人製作、
天野撮影：2017年)



Fig. 9 織道具 (ナバホ職人制作、2017年天野撮影)



Fig. 10 ナバホの結婚式場内部 (2000年天野撮影)



Fig. 11 ハブル交易所内部 National Historical Sight (2008年天野撮影)

6. むすびにかえて

ナバホ民族は、これまで強制転住や同化政策、家畜数削減政策等の苦難を経験してきた。現在も保留地は深刻な貧困や高失業率、環境問題などを抱えている。しかし、ナバホ語や儀式などの伝統文化は比較的維持されている。中でも本稿で検証してきたように 300 年以上の間、母から娘へと受け継がれてきたナバホ織物は、ナバホ女性のアイデンティティやプライドの象徴となってきた。また織物は、結婚式や成人式などで祝賀を表す供物、装飾や衣装として現在も重要な役割を果たしている³¹ (Fig.10)。

近年ナバホ織は、織手の高齢化、市場の停滞などの問題があるも、その文化的価値が見直されている。ナバホ・ネイション博物館の学芸員ビゲイ氏は、「The Weaver's Way」というナバホ織手のプロフィールや織に対する思いを記した本の出版に関わった。ビゲイ氏によれば、現在多くのナバホは、ナバホ織が単なる商品ではなく、優れた芸術品であり、民族の財産であるという意識を共有しているという。ビゲイ氏も暇を見つけては、8 歳になる娘さんとナバホ織を織る。織はうまくないが、織機の前座ると心が落ち着き、かつて織手だった母や親族に思いを馳せるという (2008 年、天野:インタビュー)。

ナバホ織は、これまでの長い歴史の中で、困難な状況にあっても柔軟に、レジリエントに存続してきた。現在、織手は減少したが、ナバホの人たちにとって織物は身近な存在である。そして織手の在り方も多様だ。キャサリンさんのように、昔ながらに家事の合間に織っている織手もいる。またビゲイ氏のように趣味や楽しみで織る人もいる。本事例の講師 S 氏母娘のように、専門の織手として活躍しながらワークショップや海外展開を繰り返す織手も存在する。織手の海外でのワークショップや展示会、織の文化交流等の活動も活発化しており、ナバホ織は現在進行形である。歴史を通じて今に繋がる織手たちのレジリエンスの原動力は、織を織ること、創造することへの強い意欲や情熱ではないだろうか。織手の一人として、今後もナバホ織の発展と織手の活躍に注目していきたい。

注

1. 本稿は、対象民族名を“ナバホ民族”と表す。ナバホは自分たちを“ディネ”と呼び、公式にも“ディネ”の名称が使われることが多い。ディネとはナバホ語で人々、人間、その言語をあらわす。
2. 保留地人口には居留地外管理地を含む。総人口は約 287,000 人。The American Indian and Alaska Native Population: 2010 Census Briefs.
3. 現在のナバホ語の話者は 167,000 人、ナバホ語のみの話者は 7,600 人。Ethnologue (2015).
4. 現在でも様々な治療の儀式、女性の成人式 (*Kinaaldá*) や結婚式などの通過儀礼が行われている。
5. 本稿では、初期の衣類や寝具等の実用的な織り物を“ブランケット”とし、19 世紀末から交易所を通じて米国市場へ出された床用の敷物を“ラグ”とした。今日、ナバホではこれらを明確に区別せず、織物全般をラグと呼ぶことが多い (Willink et al. 1996:2)。ナバホ語では糸から作られた柔らかで実用的な布地、あるいは、粗い日用品の織り物の総称をデューギ “*Diyogi*” 又は “*Diyugis*” と呼ぶ (Willink et al. 1996:2; 小谷 et al.:72; Wheat 1984:17)。
6. 南西部のアナサジ地域では BC100 年ごろから、バスケット・メーカー文化として定住、トウモロコシなどの栽培が開始された。5 世紀になると堅穴家屋、土器の製作が始まる。700 年頃、漆喰の家にキーヴァが作られた。900-1100 年ごろのプエブロ II 期が最盛期で、プエブロ・ボニートなどの建造物が作られた。その後 12-13 世紀、メーサ・ヴェルデのような断崖集落に移る。14 世紀には集落は放棄された (大貫 1995: 68-70)。
7. サルティーヨ織は長方形で、横方向に一定間隔で繰り返す縞やジグザグ、ドット模様の背景の中央に、階段状の尖った端に縁取られたダイヤモンドを配置するのが典型的である。1807 年、当時

- のメキシコ地域から来た専門家 (Bazan brothers) がワークショップを開催したことが、この地域でのサルティエヨ・スタイルの基となった。(Kaufman et al.1985:12; Mera 1987:40)。
8. スペイン人の記録では、1583年、アコマ・プエブロの居住地近辺で、エスペーホ (Antonio de Espejo) が率いる小規模な遠征隊が、ナバホと思われる人々に遭遇した。その時の様子を遠征隊の Diego Pérez de Luxán が、ジャーナルに記録している (Hammond et al. 1929:86-87)。
 9. サンフランシスコ会宣教師、ベナヴィデス (Alonso de Benavides) の報告書に、ナバホという名がある。彼は、その意味をプエブロ言語の一つであるテワ語 (タノ系言語) から、耕された畑 (cultivated field) 等と解釈していた (Kluckhohn & Leighton 1976:24)。
 10. 2002年天野：76 (表1)「ナバホ族居住集団 (Navajo Residential Group)」参照 (天野 2002:76)
 11. 難民はナバホの中で新たなクランを形成、または既存のクランに統合された (House 1996:96)。
 12. スペイン人が持ち込んだチュロ種羊は天然の豊富な毛色で、環境適応性が高く、羊毛は油分が少ないため、洗浄の手間が少なく、乾燥した南西部の手織りに適していた (Wheat 2003:17)。
 13. 現存する資料で18世紀のナバホとプエブロ織物の特徴を表わすものはいくつかあるが、例えば、キャニオン・デ・シェイで見つかったパッチワークのように数種の布を継ぎ合わせたマント; 1804年にスペイン軍によるナバホ虐殺のあった洞窟 (Massacre cave) で見つかった織物の切れ端などがよく知られている (Wheat 2003:7, 131)。
 14. ホピでは、優れた技術を維持し、男性が堅機で儀式用の織り物を織った。他のプエブロでは、織技術が途絶え、ホピから儀式用の織り物を調達した (Wheat et al. 1977:19)。
 15. ジャーマンタウンは、生産地である町の名。当時のペンシルバニア州で、現在はフィラデルフィアの一部。1875年には、4本撚りが販売された (小谷 et al. 1986:78; Wheat 1997:37)。
 16. 第7項、第二条:30,000ドル以内で15,000頭の羊とヤギを購入すること; 第三条:500頭の肉牛、1,000 lbs のトウモロコシを集め居留地兵舎に保管して、代理人の指示で、冬季の間の困窮者の救済に充てること (以下省略) (Treaty 1868:23)。
 17. 短期間に急激に羊の頭数が増えたことに対し、環境学者は有蹄動物のイラプション (ungulate irruption) が起こっていた可能性を指摘する。羊のような草食の有蹄動物が新たな、必要以上に環境収容力がある場所に入れられた時、爆発的にその数を増やし、やがて牧養力の限界を超えると群れが崩壊する現象 (Weisiger 2009:132)。
 18. ナバホ居留地に着任していた政府のエージェント、シップリー (David Shipley) は、1892年に「オセージを除いて、ナバホは、米国で最も裕福な民族である」と記録した。この時期オセージ民族の一人当たりの収入は高かったが、条約で居留地を売却した為だった (Bailey & Bailey 1986:94)。
 19. ジャーマンタウン糸は色あせや色落ちし易いなど、品質が劣るとして蒐集家や交易者から嫌われて、1900年を境に次第に使われなくなっていった。(Wheat 2003:53-54; Kaufman et al. 1985:134)。
 20. 重量を稼ぐために織物に砂を含ませたり、羊毛を油分の多いまま使用する織手もあった。クリスタル地域の交易者、ムーア (J. B. Moor) は、羊毛を東部の工場で洗浄、染色して織手に使わせることで、品質向上をはかった (M'Closkye 2002:95-105; Kaufman et al. 1985:75)。
 21. 1930年代、草木染植物を探すことは女性たちの重要な仕事になった。ナバホでは今日までに約250種の植物が発見され、使用されている (James 1977:19-23; Reichard 1997:260-273)。
 22. 砂絵は、病を得た人々の治療に何百年も使われてきたもので、神聖な、超自然の強い力を持つと考えられている。儀式が終了すると、土に返さなければならない (McCoy 1988:5)。このため、儀式図柄を織ると、不幸が起こるなどの思想がある。織るときには、織手は適切な儀式を受ける、実際の砂絵の図柄を変更するなどの工夫をしている。イエイやイエイピチャイと呼ばれる精霊や儀式の踊手を織る場合も様々な決まりがある。(Rodee 1982:68, 70-72; Begay M.H. 2003:33)。
 23. 部族評議会の立ち上げ、部族の法人組織化 (連邦予算が使えるようにする)、教育基金の設立などである。この法はその後の先住民政策の試金石となり、60年代の復権運動への足掛かりとなった。
 24. 1934年には売却された膨大な数の家畜 (約20万頭) を鉄道まで運べず、ある地域では3,500頭のヤギなどを屠殺、放置した。大切に育てた家畜を無駄にする行政の失態は、人々の激しい怒りと反発を招いた (Aberle 1982:57)。
 25. 米政府によって1935年にナバホ・シーブ研究所がフォート・ウィングートに設立され、羊の改良が研究された (1935-1966)。南西部ではチュロに加えて、1859年、1883年と二度にわたってメリノ羊が導入され、1903年にはランブイエ種が導入されていた。当時、ナバホ保留地ではこれら

- の羊が混在していた (Wheat 2003:352; James 1977:9-10)。現在も同様で、多種が混在している。
26. 後年、家畜数削減政策に対し、様々な評価がなされた (天野 2004:102-105)。ウェイシガーは環境学の立場から「我々は生態的な多様性 (ecological diversity) の回復や土壌保全 (land conservation) を目的に、そこから生計を立てている人々を無視することはできない (Weisiger 2009:242)」と述べている。
27. Lawyers for the Restoration of Navajo Life (Mann 2000:69)
28. Indian Arts and Crafts Act 1990
29. 織り物や銀細工、陶器などの正当な価格取引を推奨するため、1941年にナバホ・ネイションが Navajo Arts and Crafts Guild を設立。1972年 Navajo Arts and Crafts Enterprise となった。
30. ナバホのカーディナル・ディレクション (cardinal direction) と呼ばれる。通常それぞれの方向には4つの聖山、宝石、四季と一日のサイクルが示される (天野 2002 : 87)。
31. 「その昔、砂漠に住む人々が、馬で儀式にやって来たとき、そこで目にするブランケットの赤、インディゴと縞がどれほど鮮やかで伝統的に映ったことだろうか (House 1994:101)」。

引用文献

Aberle, David F.

1982. The Peyote Religion among the Navaho, University of Chicago press, Cicago and London

1983. Navajo economic development, *Handbook of North American Indians*, Smithsonian Institution

天野圭子

2002. 「北米ナバホ族 (ディネ) における女性のエスニシティとその再編・母系制と結婚を中心に」『愛知県立大学国際文化研究科論集第3号』 pp.73-102.

2004. 「二十世紀前期のナバホ族における家畜数削減政策」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集第5号』 pp.87-110.

2008. 「北米インディアン、ディネ (ナバホ) の染織と母系制」『高梨学術奨励基金年報』 pp.185-191

Bailey and Bailey

1986. A History of the Navajo, The school of American Research Press.

Begay, D.Y.

1994. A Weaver's Point of View, *All Roads are Good*, Smithsonian Institution Press pp.80-89.

Begay, Marry Henderson

2003 The Weaver's Way, Allen, Dodie(Texts), Allen, Carter(photographs), published by Allen, Dodie pp.33-34

Farley, Delana

2003 The Weaver's Way, Allen, Dodie(Texts), Allen, Carter(photographs), published by Allen, Dodie pp.63-64

Getzwiller, Steve & Manley, Ray

1984. The Fine Art of Navajo Weaving, Ray Manley Publication, Tucson Arizona.

Hammond, George & P., Rey Agapito

1929. Expedition into New Mexico made by Antonio de Espejo, 1582-1583 as revealed in the Journal of Diego Peroz de Luxan, a member of the party, The Quivira Society.

House, Conrad

1994. The art of balance, *All Roads are Good*, Smithsonian Institution Press pp.90-101.

James, H.L.

1977. Posts and Rugs, Southwest Parks and Monuments Association.

Kelly, Lawrence.C.

1970. The Navajo Indians and Federal Indian Policy 1900~1935, The University of Arizona Press

Kent, Kate Peck

1983. Pueblo Indians Textiles, the School of American Research Press.

Kluckhohn, Clyde & Leighton, Dorothea

1974. The Navajo, Harvard University Press, Massachusetts.

小谷凱宣、小林桂子

1984. 『特別展 19 世紀アメリカインディアンの染織』 町田市立博物館 (他)
- Mann, Kristin Dutcher
2000 Traders: voices from the trading post, *Cline Library Special Collections and Archives Department*
Northern Arizona University, Flagstaff, Arizona
- McCoy, Ronald
1988. Summoning the Gods: sandpainting in the native american southwest, *Plateau magazine of the museum of Northern Arizona Vol.59, No.1*
- M'Closkey, Kathy
2002. Swept Under the Rug, University of New Mexico Press.
2014. Navajo weavers and globalization, *Textile Society of America Symposium Proceedings*
- Mera, H.P.
1987. Spanish-American Blanketry, School of American Research Press, Santa Fe, New Mexico
- 大貫良夫
1995. 『モンゴロイドの地球 (5) 最初のアメリカ人』 東京大学出版会
- Reichard, A. Gladys
1997. Spider Woman, University of New Mexico Press (1934 first edition)
- Rodee, Marian E.
1982. Navajo ceremonial-pattern weaving and its relationship to drypainting, Brugge David M. & Frisbie, Charlotte J. (Edts.), *Navajo Religion and Culture: Selected Views, Museum of New Mexico Paper in Anthropology No.17, 68-74*
- Spicer, Edward; Commented by Collier, John
1952. Sheepmen and Technicians, Human Problems in Technological Change, Russel Sage Fundation,
The Navajo Treaty, K.C.Publication in cooperation with the Navajo Tribe.
- Willink, S Roseann & Paul G.Zolbrod
1996. Weaving a World, Museum of New Mexico Press.
- Weisiger, Marsha
2007. Dreaming of Sheep, University of Washington press.
- Wheat, Joe Ben, Harmsen W. D., Conn.G.Richard , Link, Martin
1977. Patterns and Sources of Navajo Weaving, Harmsens Western Americana Collection.
- Wheat, Joe Ben
1984. The Gift of Spiderwoman, The University Museum University of Pennsylvania, Philadelphia.
2003 Blanket Weaving in the Southwest, Hedlund Ann Lane (edit.) The University of Arizona Press.

(あまの・けいこ／北海道民族学会会員)